

Journal of the Magnetics Society of Japan の取り組みに関するアンケート結果報告

編集委員会

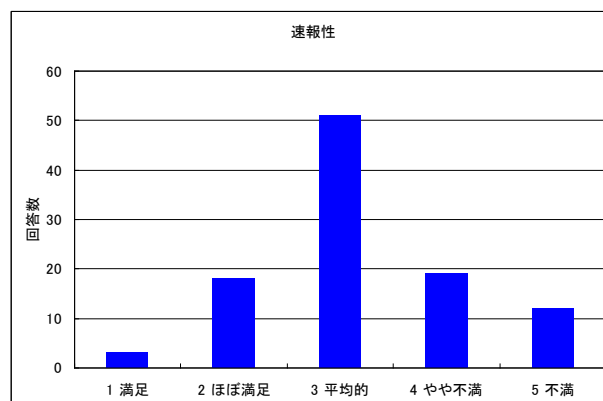
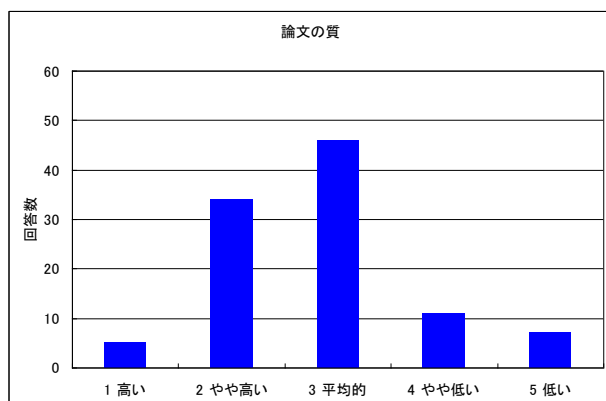
日本磁気学会誌 Journal of the Magnetics Society of Japan(JMSJ)の取り組みについて、会員の皆様に対して実施いたしましたアンケートの結果を報告します。

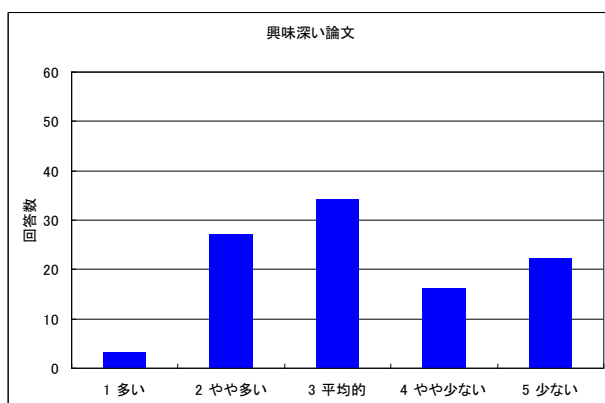
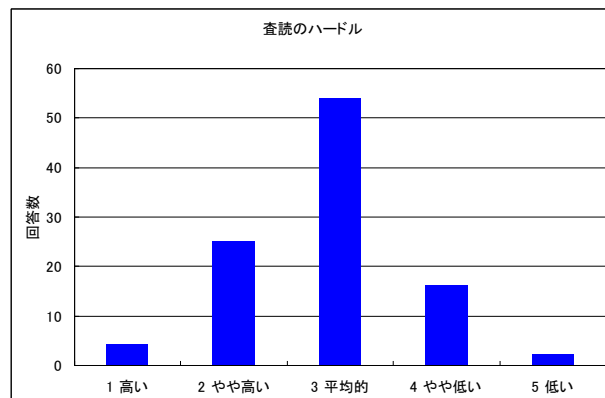
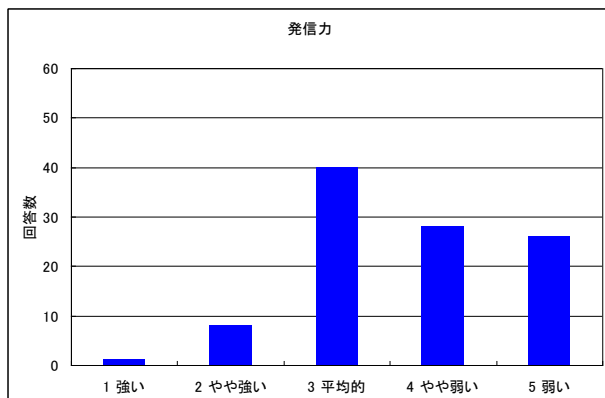
本アンケートは、JMSJ の論文数が減少している現状を受け、JMSJ を多くの研究者・技術者に投稿していただく学会誌とするにはどのような方針で進めるべきか、会員の皆様の声を反映させながら考えていきたいという理事会、編集委員会の判断に基づきおこなったものです。実施期間は 2015 年 3 月 26 日から 4 月 3 日の一週間でした。短期間であり、FAX あるいはアンケート用紙を pdf 化してメールで返送するという手間のかかる回答方式であったにもかかわらず、会員 1500 名超に対して 103 通のご回答をいただきました。JMSJ を憂慮するご意見も多数寄せられ会員の皆様が JMSJ のことを真剣にお考えいただいていることを改めて認識できる非常に有意義なものでした。理事会、編集委員会より御礼申し上げます。

アンケートでは、以下の 5 項目を調査しました。

- ①JMSJ をどのような雑誌と考えていますか？
- ②JMSJ に望むことは何ですか？（複数選択可）
- ③JMSJ の論文数を増加させるにはどのような方法がありますか？（複数選択可）
- ④JMSJ の目指す姿について
ISI 取得、論文の言語、学術講演会特集号（日本語許容）
- ⑤本アンケートに対するご意見

① JMSJ の現状認識のための質問です。論文の質、速報性、発信力、査読のハードル、興味深い論文についてお伺いしました。その結果をまとめたのが、以下のグラフです。

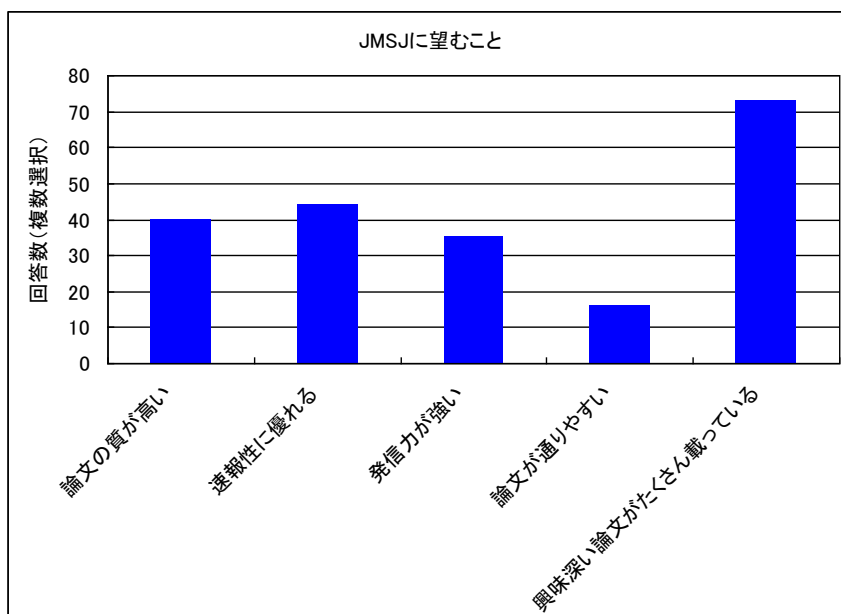




論文の質は標準からやや高めという回答が多く、速報性や査読のハードルについては平均的であるというご意見が多数を占めています。一方、発信力は弱いという声が多く、また興味深い論文については回答が分散していますが、全体的に低めというご意見が多いという結果になっています。すなわち、JMSJは、論文の質は比較的高いが発信力に乏しく、興味ある論文の掲載はそれほど多く掲載されていない学術誌という認識を持たれているのが現状と考えられます。

② JMSJに望むことは何ですか？

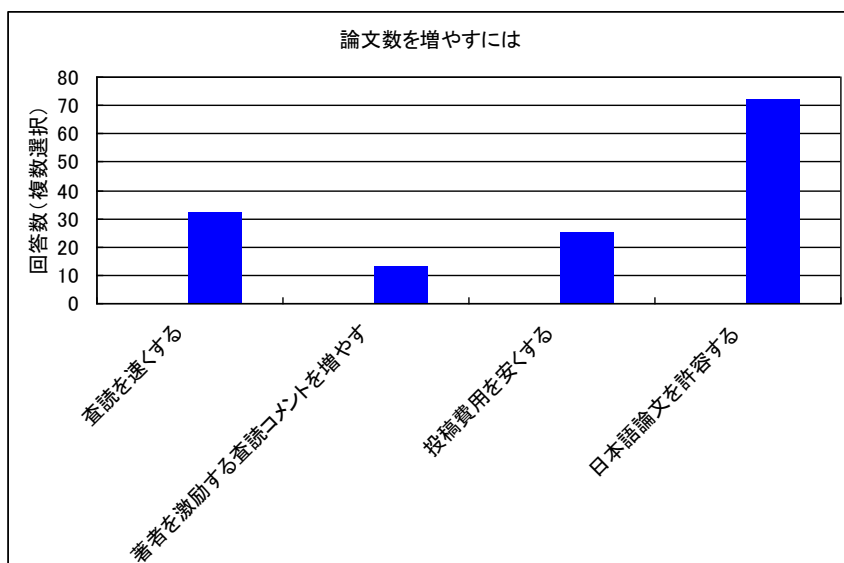
ここでは、論文の質が高い、速報性に優れる、発信力が強い、論文が通りやすい、興味深い論文がたくさん載っている、の5点に絞ってJMSJに望まれることをお伺いしました。複数回答を可としてお伺いした結果が次のグラフです。



興味深い論文がたくさん載っている雑誌であることが強く望まれています。当然なことではありますが、学会誌としての存在感を出すには最も重要な要素であるといえます。次いで論文の質が高い、速報性に優れる、発信力が強いといった項目の回答数が多くなっています。これに対して、論文の通りやすさを望む声は比較的少数でした。磁気学会の論文の査読は厳しすぎるというご意見も多いのですが、「望ましい姿」という問いに対しては、あまり重視されない項目と思われます。

③JMSJ の論文数を増加させるにはどのような方法がありますか？

それでは、論文数を増やすにはどうすればよいか、査読の迅速化、著者を激励するコメントを増やす、投稿費用を安くする、日本語論文を許容するという 4 点について、複数選択可の質問をしました。その結果が、次のグラフです。



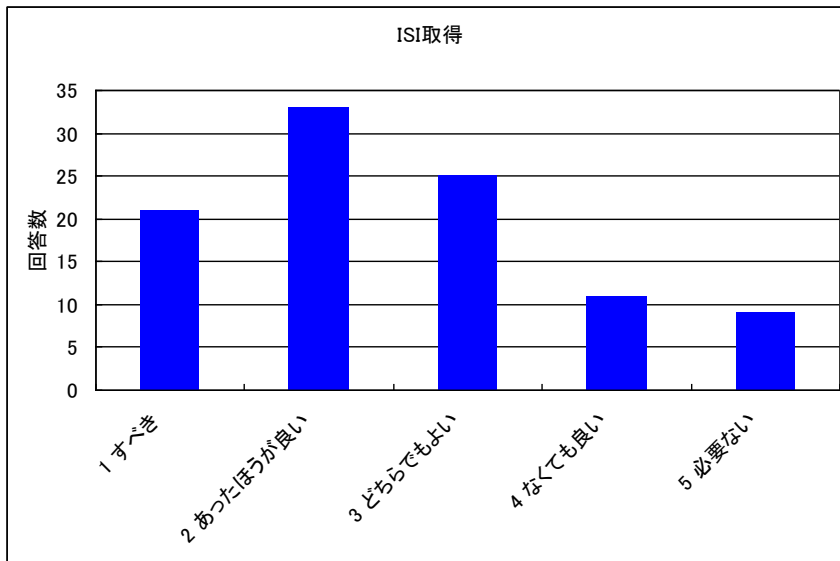
全回答者のうち約7割が日本語を許容するという項目を選択しています。かつてのように日本語で投稿できることが論文数増加に繋がるとのご意見が多いことがわかります。

④JMSJの目指す姿について

ここでは、JMSJを今後どのような学会誌にしていくか、ISI取得、論文の言語、学術講演会特集号の発行という観点からお伺いしました。

まず、ISI取得についての結果を示します。

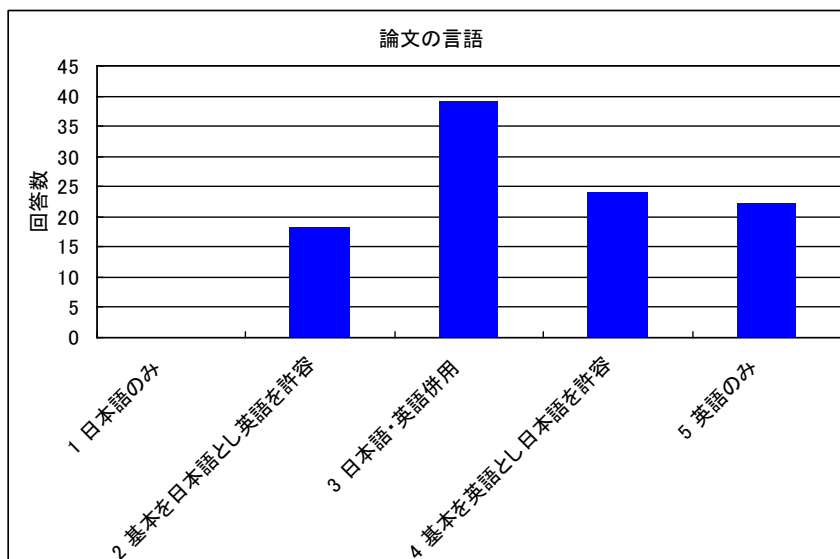
ご存じのようにJMSJは現在ISI登録されておられませんので、登録にむけた活動として論文の英語化、電子ジャーナルのオープンアクセスなどの取り組みを進めています。こうした活動を継続すべきか否かを判断する材料としてお伺いしています。



集計結果をみると ISI はあったほうがよいという回答が最も多くなっています。ただし、自由記入によるコメント欄には ISI 以外にも目指す方向性はあるので必要ないといったご意見もあり、この件に関する会員の皆様の賛否は分かれています。

次に、論文の言語について結果を示します。

JMSJ は英語論文のままでよいか、それとも日本語論文を許容した方がよいかお伺いしました。

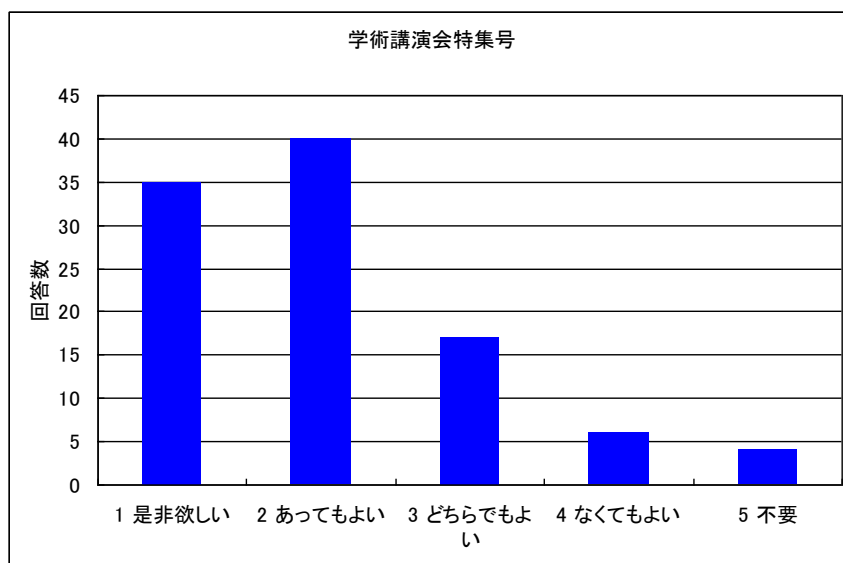


日本語、英語を併用するという回答が多くを占めており、英語のみというご意見はありましたが、日本語のみという回答はありませんでした。かつてのように日本語でも投稿

できるものであって欲しいというご意見が多いという結果でした。

学術講演会特集号について

現在、学術講演会で発表された論文をまとめた特集号は発行していませんが、編集委員会ではその復活を望むご意見も伺っております。そこで、日本語を含めた学術講演会特集号を復活させることについて、ご意見をお伺いしました。



是非欲しい、あってもよい、というご意見が大多数を占めています。

多くの会員が学術講演会特集号、それも日本語を許容したものを発行することを望んでいると考えられます。

集計されたデータから会員の皆様の声として、興味深い論文の多数掲載、日本語の許容、学術講演会特集号の復活、といったご意見が多く、ISI 取得に関しては様々なご意見のあることがわかりました。

このアンケート結果を踏まえ、理事会で今後の JMSJ の取り組み方について議論しました。そして、

- 国際化に対応するために ISI 登録を目指した活動は継続する。
 - 学術講演会における研究成果を集積した学術講演会論文特集号を復活させる。
- という方針を進めることを決定いたしました。

そのため、JMSJ は当面採択された一般論文に加え、レビュー論文及び専門研究会から厳選された論文を中心とした構成とし、高い引用数を目指します。一方、学術講演会論文特集号は多くの方に投稿いただけるよう日本語、英語いずれの論文も受付へ、JMSJ とは異なる書誌として発行することにいたします。なお、論文特集号につきましては、2016 年から

の実施を目指して鋭意取り組むことになっております。

アンケートの回答には、この他厳しくも重要なご意見が多数寄せられております。いずれも真摯に JMSJ のありかたについてのご意見であります。以下ご紹介いたします。

※ JMSJ をどう考えるかに対するコメント

○ 論文数が少ない。

- ・ 数が減っているのが課題かと思えます。玉石混交でも数が多ければいいのです。
- ・ 論文数が少なすぎる。

・ ますます JMSJ が薄くなってきましたので先行きが本当に心配です。また、「まぐね」誌にしても解説「磁気記録」記載されますが、魅力あるテーマを掲載すべきと思えます。最近誕生した全く新たな魅力あるテーマはないでしょう。論文表彰についても、新規性の高い論文に授与されることを希望します。

・ 論文の数が少ないのでいつも注目すべき論文が出てくるとは限らないが、査読がしっかりしているので掲載された論文の質は非常に高いとみている。近年、JAP や Nature ですらいい加減な内容の論文が散見されるので数少ない信頼における論文誌と感じている。

○ 興味ある論文誌になっていない。

・ 磁気学会の会員のみが目を通す雑誌であるため少し異なった分野の研究者の興味の対象になっていない。

- ・ 応用志向の論文（企業など）の数の増加が望ましい。
- ・ タイムリーな解説（レビュー記事）

・ IEEETransactions on magnetics には、投稿したくなるが、JMSJ に投稿したくなりますか？この意識が重要です。

- ・ 古い論文には興味深い論文が多かったが最近は減少傾向

○ 役割を終えている

・ 歴史的役割を既に終えた英文誌。会員による水準の高い論文は国際的学術誌に投稿される。欧文誌の衰退は、会員の国際的学術水準が上がった結果であるので、むしろ喜ばしいことといえる。会員は同一内容の研究を、Intermag, MMM など活発に発表しており、国内学術講演会で発表した内容を国内紙に英文で投稿する必然性が無くなっている。赤字

事業は世の中から必要とされていない証拠であり、ニーズのない学術誌をこれ以上継続する必要性はない。

- ・ 論文誌としてほとんど機能していない。質・量ともに最低だ。

○ 苦い経験

- ・ かなり歪んだ査読を経験しており、以来 **JMSJ** には投稿していません。本来なら、担当編集員が機能していれば問題ないのですが、単なる仲介に終わっているケースが多い。
- ・ 現状は英文のみの投稿なので査読のハードルが高いと考えざるを得ない。
- ・ 投稿してから査読が終わるまでが長い。

○ 前向きな意見

- ・ 磁気の専門誌として初学者に勧めやすい
- ・ 最新の磁気工学および応用磁気工学に関する研究に関する情報収集および敏速に投稿できる、掲載できる速報性の和文誌を目指してほしい。

○ その他

- ・ 自社の磁気関連の設計開発を実施していないため情報収集として活用しております。そのため論文投稿も実施していないことから、査読のハードルは記入できませんでした。
- ・ 磁気記録関連分野以外はあまり見ていないため、全体の印象と傾向が違うかもしれません。
- ・ **ISI** 登録必須

※ **JMSJ** に望むことへのコメント

○ 投稿しやすい

- ・ 気楽にどんどん投稿できる。ただ **isi** は無くても学術誌論文としての業績にできることはほしいですので査読はやっていただいて日本磁気学会誌に載せるようお願いしたい。
- ・ 論文を提出しやすいイメージの向上

○ 日本語論文

- ・ 上記項目は当然ですが日本語論文を望みます。学生教育、企業の方の博士取得などのため **3M** や **Intermag** との差異を出すこと
- ・ 以前のように日本語の論文が読める。
- ・ 日本語投稿を可能とし、論文を書きやすくする必要がある。

○ 学会特集号

- ・ 学術特集号を出して、論文賞を審査員だけではなく読者からの意見も反映するのはいかがでしょうか

- ・ 学会発表された内容について報告されていること

○ 査読迅速化

- ・ 玉石混交でも構わないので先端研究成果を論文の形で早く出版することが大切。玉の選択や石への批判は読者へ任せる。形式、格式を重視しすぎると閑古鳥が鳴くことになるでしょう。

- ・ 速報性を重視するならば、MSJ レター(英文)を創設してはいかがでしょうか。

- ・ 日本の学会の雑誌として日本発のオリジナリティーのある論文の速報

- ・ 速報性についてはオンライン対応でないと勝負にならないのでは？ 紙媒体では遅いのはしょうがないです。

○ 興味深い論文の掲載

- ・ 優れた Review が毎回載っている。

- ・ レビュー論文をメインに取り扱う。

- ・ 磁性に関連する広範囲(基礎工学的なものから実用工学的なものまで)な論文が集まっていること

- ・ 生体磁気工学系の論文が少ない。

- ・ 産業界の研究者が投稿可能な分野(論文, 報告など)を作ってはどうか。

○ 期待無し、廃止

- ・ 期待することなし。自ら JMSJ を情報発信の媒体として選択したことがないし、今後も選択しない。査読経験はあるが、あまりに質に低い学生論文を指導教官に代わって査読させられた記憶しかない。

- ・ 何も望みません。廃止した方が財政面を考えるとよいのでは？ 隔月の会報で十分。もし論文誌をどうしても発行したいのなら応物 or 金属学会に合流すべき。

- ・ 根本的な位置づけを再検討すべき時である。

- ・ 号数減らしてもいいから薄い冊子はやめてほしい

○ 教育

- ・ 大学の学生が初めて論文を書く場合の実践の場を提供する。

※ 論文を増やすことに対するコメント

○ 論文言語

- ・ 「日本語論文」は重要です。日本語でもレベルの高い論文はたくさんあります。
- ・ 上記項目はすべて賛成です。さらに日本語論文で学会として良いと考えられるものを年間で5~10%程度英文化して wiley などにて出版するのはいかがでしょうか。(電気学会などで行っている方法に乗るのもいいと思います)
- ・ 日本の学会だから日本語論文を排除する考えはおかしい。日本の独自性をもっと認めるべきである。英文論文を否定するわけではない。英文でなければだめだという考え方はおかしいと主張しているのです。
- ・ 現状でわざわざ英文の論文を完成させたのであれば MSJ の論文誌ではなく国際誌に投稿する人が多いように思います。かつての MSJ 論文誌は日本語が投稿できたところに意義があったように思いますし、現在でもその状況は変わっていないように思いますが、いかがでしょうか。
- ・ 英文であれば JAP. J of 3M, その他の英文誌へ投稿することを選択する人が多いのではないかと
- ・ 英語だけですと InterMag のほうが投稿しやすいように思われます
- ・ 既に欧文誌としての歴史的役割を終えた。和文誌にして「まぐね」と合本で出版するのが最も良い選択。和文誌は優れた解説記事や、学生論文発表の場としての存在意義がある。
- ・ 論文言語は院生なども手軽に投稿できるよう和文、英文併用にさせていただくことを希望します。

○ ISI

- ・ INPACTFACTOR の上昇、
INPACTFACTOR を上げる方法：できるだけ分野の特集号を2年ごとにくみ JMSJ の論文を引用する。(金属学会で採用)"
- ・ インパクトファクターを取得できれば海外からの投稿が増えると思う。
- ・ ISI 登録に尽きる
- ・ 投稿先を選択するとき①雑誌のクオリティ(IF含む)②業界内でのサーキュレーションがいい、つまり世の中から無視できない論文となることを考えます。
- ・ 日本語論文の許容は論文投稿数は増えるかもしれないがインパクトファクター取得にとってマイナスであると思う。一部企業の会員から「インパクトファクターのない論文誌に投稿しても意味がない」という声を聴いており、ISI 取得が、論文数の増加にもつながると考える。

○ 査読

- ・ 査読を一名にして著者からの査読への回答を容易にする。査読における論文の完成度の要求レベルを過度に高くしないよう編集委員会で申し合わせる。
- ・ 学術講演会の特集号（以前）の場合のような迅速査読を基本にする。和論文も許容する。英語文章作成に不慣れな企業人、学生にとって英語+査読+出版までの期間(長い)は三重苦の関門だろう。
- ・ 数ある Journal の中から JMSJ を選んでくれた「お客様」という扱いで「査読」ではなく「よりよくするためのアドバイス」を行う。速く処理する。"
- ・ 海外のジャーナルは採択するにはまた、よりよくするにはどうすべきか非常に有効なコメントが多い。

○ 論文の質的向上

- ・ 良い論文が掲載されるようになれば自然と論文投稿数が増すので安易な方向へ向かっても目的は達成しないと思う。JPSJ や JJAP が現在の状況になってきたプロセスを参考にするのがよいのでは。JMSJ が***以外にも目を通す人が増すことが重要である。
- ・ レベルの高い論文にする。
- ・ 産業(学術分野含む)にインパクトを与える磁気技術の創出、産業分野への応用例が少なくなってきた

○ Review 論文

- ・ Review を Invite する。紙媒体をあきらめる。
- ・ 招待論文 特集号などの企画 インパクトのある成果が出てきたときそこから新分野が生まれそうなとき

○ 学術講演会

- ・ 学会発表の内容については日本語の紀要のようなページ数が少なく査読のないものや体裁のチェック程度の査読レベルの発表の場があってもいいのでは？学生の英語論文の土台になるような程度の内容のもの、査読者の感想、コメントがあって、改訂しても構わないという程度のもの
- ・ 大学（学生）に働きかける

○ 宣伝

- ・ JMSJ を海外の研究者に知ってもらうための広報活動。国際会議などに JMSJ の flyer を置かせてもらう。各種国際会議の論文特集号など
- ・ JJAP のレターとして、APEX が誕生したように、JMSJ のレターとして MEX (MagneticsExpress) を導入することはいかがでしょうかポイントは早いという点、JAPAN が論文名にないという点です。また、メルマガに載せるのもいいと思います。APEX も以前

やってきました。国際化を推進するのであればこのくらいはトライすべきかと思います。外国からの投稿も増えると思います。

○ 分野

- ・ 対象範囲の拡大，必要。できなければ応物の一分科会でもいいくらい存在価値が小さい。
- ・ 「掲載論文レベルの維持，向上」と「投稿のしやすさ」を両立させるには，窓口を広げる必要があるが，磁気学会の中の分野は特定の狭い学問領域を示す分野で分類されると感じられる。学会が投稿者を選んでいるような印象を持つ。多様かつ広大な学術領域を持つ「磁気」のメリットを十分に活かすような分類（極端に言えば磁気現象，磁気材料，磁気応用などの大雑把な分類）としたほうがよい。

○ 他誌連携

- ・ IEEEなどと連携をとる。たとえばIEEE Trans. Magn.で不採択だった論文はJMSJ査読に回るようにする。あるいはJMSJへの投稿論文のうち優れたものは「JMSJ推薦論文」としてIEEEに推薦するなど。相互乗り入れ可能であれば，投稿者にはかなり魅力的だと思います。論文数は増え，IFも上がると思いますが，論文誌としての格はどうしても英文誌>JMSJとなります。

○ その他

- ・ レターも可とする
- ・ 農業系の生体磁気工学では，磁気研究をされている工学系の研究者にもわかりやすいように簡単な用語，たとえばStamen:おしべ，Petal:花びら，Controll:対照などの用語説明欄を設けたらと思います。場合によっては専門用語に限定してもよい。
- ・ 投稿数が少ないことが一番の問題。
- ・ 学会幹部の偉い先生方が，優れた成果をJMSJに公表し，まずは範を示すことが大切。本当にJMSJを存続させたいなら

※ ISI 取得に対するコメント

○ 取得に前向き

- ・英文化した論文が引用されていけば isi 取得できると思います。
- ・英語でないと論文誌のステータスが上がらない。

○ 留保付き

- ・ISI 取得はあった方がいいが現状は ISI 取得に必要な論文投稿のバリアが高くなったとの印象がある。
- ・あった方が望ましいが低い数値だと投稿敬遠になりかねない。
- ・ISI は手段であり目的ではない。以前は IEEE が自らの費用で英文化までしてくれた。
- ・ISI 取得とともにサイテーションインデックスを上げることがセットで考えなければならぬ。ただし世界的にインデックス
- ・どうしても無理であれば JJAP の分冊のような道もあるのではないか。
- ・ISI 取得のためのコスト(人的, 予算的) による

○ 不要、重要でない

- ・必須ではないでしょう
- ・当初はぜひ必要と思いましたが現状を見ると無理をしない方がよさそうです。⑤に記載させていただきますが、とはいえ今しばらくは取得への努力を継続してはどうでしょうか
- ・学会誌がほかの商業誌と競い合っても意味がない。国際誌としての役割は終わったので、和文誌として継続すればよい。
- ・誰がこんな意見を出したのでしょうか。身の丈に合った運用をしましょう。
- ・企業の技術者の立場からみると、インパクトファクターはどうしてもよい。速報性と技術者/研究者の議論の場として盛り上がればよい。
- ・ISI を取得しても論文数は増えない。建前ばかりを先行しないように。足元と自分の実力をよく見てください。
- ・MSJ 論文誌にインパクトファクターがついたとしても、1 をはるかに下回ると考えられ、今後の努力で改善するとも期待できないと思います。であれば無理に英語化して会員のニーズに反する雑誌にするよりは、IF なしでも会員の需要に合ったものを編集してほしいと期待します。

○ その他

- ・IEEE Transactions on Magnetics のレベル、内容を目指すべきで、インパクトファクターはおのずとついてくる。
- ・日本磁気学会に名称変更してから物理学会あるいは応物学会との違いが分かりにくくなったことが投稿論文減少の一因ではないでしょうか。磁気応用に力を入れていることをも

っとアピールしていくといいと考えます。

- ・分かりません

- ・ISIの中身がわかりませんのでお答えできません。

論文の言語に対するコメント

○ 日本語許容

・原則として、下記のような特集号に限って、あるいは学生からの投稿に限って、日本語を認めるのはありかと思います。ただし、isi 取得にはマイナスにならないようにすべきです。

・日本語英語ともに許容して、最初から英語のものは wiley など出版してもいいと思います。先に述べた日本語から英文化したものは印をつけてアピールするなどして対応してはいかがでしょうか。

・日本語は「まぐね」に統一しては？

・優れたレビュー論文が日本語で書かれていれば、日本人がほとんどである会員にとって貴重なサービスになると思われる。日本語でまともな論文も書けない学生が増えている状況で英文で論文を書かせてもほとんど意味がない。仮に ISI が取れなかったとしても日本語で質の高い論文が出せれば、価値があるのではないのかと思う。

・論文数を確保するためにも選択肢を狭めないように英語を基本とし日本語も許容するのがよい。ISI 取得に対して日本語の許容がどの程度マイナスになるのかわかるとよい。

・ジャーナルとしては、英語のみとしないと世の中には通じないと思いますが、一方ほかの分野では(電気など)邦文を論文として認めているコミュニティも存在します。企業会員が邦文を求める場合、ドメスティックなニーズに答えるのであれば④が選択となります。

・原則英語とし、筆頭著者が学生の場合に限り例外的に日本語を認める。あるいは英語以外は許容しないが、英文校正の業者と提携することにより、会員価格で英文校正を受けられるようにする。

・日本語論文の投稿を希望し、英語であることがハードルになっている人が多くいるのであれば JSMJ(英語のみ)+日本語論文誌のように分けるのも手ではないかと考えます。

・ISI 取得にこだわるのは、問題ではないか。むしろ論文の日本語執筆を可能として、投稿しやすくすべきと思う。

・論文の言語として日本語を容認した方がいいと思います。日本語を容認すれば日本の学生の投稿が増加するのではないかと思います。私的な意見ですが、言語が英語の場合論文を作製する費用対効果を考えるとすでにインパクトファクター(たとえ小さい数値でも)がついている論文誌に投稿すると思います。

・これまで英文化を行った私どもの論文はすべて IEEE Tran. Mag. MMM, IEE 等海外の論文誌に投稿しております。

○ 英語

・本心は「3か4」です。しかし、冒頭の目的で「英語のみ」で走り出したはずで、見通しが甘かったのかわずか 1 年で軌道修正を迫られ、何もせず戻しますでは責任問題にも発展しかねないです。この状況を改善するためのあらゆる手を講じる必要がまずはあると思

います。

- ・誌名が英語なのに日本語はおかしい

ISIについて

- ・isi がすべてとは言えないといえます。一つの重要な参考値です。
- ・論文誌は不要

※ 学術講演会特集号に対するコメント

・学術講演会の内容が論文となって時をおかずに出るのは MSJ にとって最も必要なことと思います。学術講演会と論文誌が学会の柱ですからその相乗作用を促進する重要な施策と思います。

・和文許容の学術講演会特集号を設ければ確実に論文数は増えると思われる。逆に、通常号の論文数は減少となるが、トータルで増加することの方が大切。

・学術講演会は世界的に見てレベルの高い発表がなされていると感じている。したがって、その成果を論文の形で残してもらいたい。

・MSJ の学術講演会以外に磁気関連の国際学会の proceedings の投稿先として JMSJ を選択できるようにする。

・私の意見は「ある方がよい」ということで上記の1と2の間くらいです。(2の「あってもよい」というのでは言い換えれば「なくてもよい」ということにもなり結局3の「どちらでもよい」と同義なのではないかと思います)

・あってもよいのですが印刷された冊子は不要です。

・学会賞にノミネートされても、論文投稿されない例があると聞く。投稿しやすくするのが、論文数を増加させる最も近道と思われる。

・日本語を許容すると修士取得の手段とされてしまい、グローバル化教育に反する。せめて修士で一報英文化すること、その代りアドバイスを早くする。日本語のみでは本人および教官に逃げ道を与えている。

・ただし、selected papers としてかつ英文のみとする。

・財政的負担になるならやめてよい。

※ その他のコメント

- ・ 速報性を増すために論文の数が少ない場合でも一か月ごとの発行とし、ただし送料、印刷費節約のために web 版のみとする。冊子の発行は中止する。節約した費用は投稿料低減などに回す。英文に対するハードルが高いようなので英文化の支援を充実する。
- ・ まぐねと論文誌の二つに分けてはいかがでしょうか。IEEE も E ジャーナルのレターと Transactions の二つがありますし、ほかの学会でも和文論文誌と英文論文誌を持っているところもあります。これまで isi へのご努力は本当にありがたく思っていますので今少し英文誌をこのまま頑張っ様子を見、一方でまぐねに和文論文を入れ込むか電子出版だけの和文論文誌を作るかして和文論文を復活させてはいかがでしょうか。幅広く投稿できる査読は一名だけとして簡便で過度なレベルを求めずただし論文として業績化でき(isi はもちろんなし)ものとすることはできませんでしょうか。特に学術講演会の発表の多くが時間をおかずに和文論文で出る流れを作ると、コンファレンスと出版の双方にいい結果が期待できるようなにも思います。編集委員会にはご負担ですみませんがよろしく願いいたします。
- ・ 英文誌にしてしまうと、研究論文は海外の有名な論文誌の方への投稿へどうしても流れてしまう。学会の情報発信力を高めるには、日本語も許容し、日本向けの発信力を強めた方がいいように思える。
- ・ 学術講演会の内容をプロミューディングスにすることで、今よりもインパクトファクターの高い雑誌を目指した方がよいと思います。
- ・ 「全体としての意見」 日本語で書かれた論文は外国から読まれない、引用されないのでは意味がない。ただし、われわれ日本人には言語障壁がある。日本語の方が細かい描写が可能であるし、想いを伝えやすい。だから翻訳に関する業務をサポートする充実したシステムがあればよいのではないのでしょうか。査読の段階でやりとりが日本語でできてそれが結果的に全部英語で発信される。「日本文化」を世界に問う素晴らしいシステムです。その分のコストはかかるわけですが、それはどうするかは知恵を出せばよいと思います。インパクトファクターを高めるためには、ノーベル賞級の論文が掲載されるようになればいいわけです。結論として、JMSJ の役割は「日本文化に根差した」優れた技術レベルを世界に発信する窓口(架け橋)となることだと思います。「日本の文化」を忘れないことが JMSJ の立つ位置です。
- ・ 1年または2年ごとに、分野ごとに研究発表動向や新技術などをレビューした解説またはレビュー論文を掲載していただけると、貴重な資料になりそうな気がする。
- ・ 日本語の論文は学生が書ける論文ということで、必要だと思います。日本語で発表できる論文は稀有であり、日本のための知的財産を残すためにも貴重であると思います。
- ・ 英文が慣れていない日地は、ほかの学会で発表を済ませてしまうのでは？特に企業人は忙しく、英文作成に手間はかけたくないでしょう。
- ・ 日本語で幅広い論文を載せることが大切です。差別化につながります。
- ・ 英語のみにしたら投稿が減った。

- ・ 日本磁気学会が英文誌化する際にそれなら IEEE Magn. などに出せばよいと率直に思いました。本誌が IF を上げるためには、著名外国人研究者が本誌に投稿するような状況が必要です。日本語を許容する方向へ戻したとしてもいったん離れた研究者は戻ってこないのではないのでしょうか。
- ・ 質の高い論文が JMSJ の価値だと思う。数は多いがレベルの低い論文ばかりだと誰も見なくなるのであろう。そうなってしまったら私は一瞥もしないようになるでしょう。日本語論文は、国際標準とは外れるかもしれないが、学生の教育にも磁気関連の学理の底上げにも有用であると思う。考慮してもらいたい。大変だと思いますが頑張ってください。
- ・ まず、日本語論文、それから英語論文というプロセスが MSJ にあってもよいのではないか。また、ショートペーパー or レター(英文)があってもよい。
- ・ (本気で) ISI 取得を目指すのであれば毎号 10 件程度の特集などを企画するなどして強制的にでも論文投稿させる必要があるのではないかと思われる。また関連分野の研究者間で半強制的に引用しあうなどの合意を取り付ける必要があるのではないのでしょうか。
- ・ 母国語で論文を発表できるというのが国内学会誌のメリットだと思う。英語が必須ということであれば海外の著名誌にまず投稿するというのは自然な流れである。企業の技術者が投稿しやすい雑誌を目指してほしい。
- ・ 日本磁気学会のいいところは母国語でも投稿できる場所にあると思います。
- ・ 英語化したことにより MSJ への投稿のメリットが失われたと思います。MSJ の論文は学生が練習として日本語で投稿できる、初学者が難解な物理をわかりやすく読めるなど多くのメリットがありました。英文であれば他にもっとインパクトファクターの大きい雑誌があるので投稿数が減るのは当然です。
- ・ 大学の研究者は英語を読める人がほとんどだとは思いますが、日本の磁気研究を支えている装置メーカーの技術者、営業の人にとっては、日本語で最新の情報に触れる機会があった方がいいと思う。
- ・ 今の状態ですと英語で書くのであれば JMMM などの海外の雑誌に投稿しようという思考になるかと思います。いきなり英語のみにするのではなく徐々に英語の投稿を増加してゆく方向はありませんでしょうか。たとえば、英語投稿の場合は掲載料を安くする、査読を速くするなど。また、今回英語のみといたしましたが、その結果、投稿数が減少することは想定内であったかと思います。その覚悟はされていたのではないかと思います。今後の発展、充実を期待しております。
- ・ 英語が実施一年にして投稿数激減ということで答えは自らはっきりしている。英語論文は JPSJ, APEX, JJAP などに投稿すればよいのではないか。質の高い日本語論文が集まれば、かつてのように英語が出版されることもありうる。
- ・ 新規性の高い内容の論文誌にしてほしい
- ・ 学生(修士まで)が自分で書くことを想定すると、日本語の論文誌があった方が望ましいと考えます。(大学の教員として)

- 論文数が減っている理由は成果の急がされるプロジェクトに絡むような良い結果はインパクトファクターの高い雑誌のレター英語論文として出版したいため、JMSJに出す動機が弱い。JMSJに関連した実験結果を出してもよいようなハードルの低いカテゴリがあれば学生に練習として書かせようという動機になる。

- JJAPのように生き残りを図りIOPに委託する。あるいはJPSJのように国内を主たるターゲットとして現状維持とする。どろろもあり得ると思います。長い目で見ればJJAPの様な対応をしないといずれ廃れていくことは避けられないと思います。

- 論文誌を含む他国内学会との連携

- 論文の増加とISI取得は相反することに思います。読者としては論文が多くなってくれた方がうれしいです。

- 英語でも投稿したくなるように持っていくには、ISI取得が欠かせないと思います。

- ISIを取得すれば現状よりも投稿件数や論文の質の向上が期待できるのでぜひ頑張って取得すべきだと考えます。

- インパクトファクターを取得したいのであれば、(難しいことかもしれませんが)金属学会のように学会誌のほかにほかの学会との共同で発刊する欧文誌を作ることも一つの方法かと思います。

- ISI取得のためのルールが最大の問題点と思う。ISI取得は結果としてenjoyするもので目的にしたことは間違いではなかろうか。

- 一介のポストドクの見解ではありますが、ISI取得を目指すに当たり、学会の世界的な知名度を高めることも重要だと思います。講演大会、研究会に海外の研究者を招聘する、招待講演を依頼することなどはいかがでしょうか。また、このようなアンケートの実施は適宜必要と思いますがwebの利用は検討されてはと思います。郵送よりも低コストであり、また集計の手間も省けるのではないかと思います。

- 費用対効果を考えて絶版まで含めて判断すべき

- 磁気学会の財務状態を圧迫する意味のない事業は、急ぎ廃止すべきである。磁気学会欧文誌の衰退は多くの会員が国際的に活躍している喜ばしい状況の反映であり、これ以上時代にそぐわない事業を継続する意味はない。JMSJはすでに欧文誌としての競争力はなくしている。ISIの取得は藪蛇になりかねない。磁気学会の厳しい財政状況の下で、回復不可能なこの事業を継続するのは正しい選択とは思えない。JJAPに吸収してもらい、JJAPに磁気学会からの編集者を数名加えてもらうのが、最適の選択と考える。ただし和文誌は必要であるので、欧文誌を廃止し、和文誌の充実に一層の努力を払っていただきたい。

- 何よりも財政面で足を引っ張らないようにすることが大切。昔ISIの話もありましたがそれにかかわる膨大な費用を考慮し、その話はなくなったはず。何を根拠にISI取得の

話や国際化と呼ばれるアジア化が進められるようになったのか理解できません。

- ・ 応用磁気学会が創設された当時「日本語で学術論文を書く」ことの重要性が強調されたと聞いている。その後先人たちの努力により JMSJ の日本語論文が学位審査、採用人事、業績評価により採用されるようになったのにどうして英文化など先祖がえりしてしまったのか理解できない。若い会員にとって全く利用価値がない。せっかく英文で書いたら JMMM をはじめ電子ジャーナルや国際会議論文として、投稿するはず。JMSJ に論文を投稿しないのなら学会に入る必要もない。

- ・ 国際的な磁気関係の良い雑誌がほとんどないので JMSJ がその存在を示すことは可能であると思う。最近 JMMM のレベルが低下していると感じるので JMSJ のレベル向上は重要であると思う。

- ・ 一つのナンバーに一本しか論文がないときは、発行コストがかかって大変そうに思います。改めて編集部の皆様の御苦勞お察しいたします。

- ・ 昨今論文発表の機会は格段に増えている。投稿から採択までの期間も短縮化している。伝統ある学術誌でも旧態依然であればおのずと淘汰されることになる。頑張ってください。

- ・ 最近の JMSJ はじめ、国際的磁気関係論文誌（国際会議含む）ほとんどが古典的研究の継承で斬新な魅力的テーマに乏しい感がします。同じようなテーマが多すぎる ex. ナノマテリアル……，古典的テーマ：ex. 磁気記録，モーター，磁気シールド。このままでは磁気分野を研究する若手研究者も激減します。さらに重要なことは、磁気工学を身に着けても、将来技術者として先細りしてしまう感がします。せっかく院生として磁気工学を習得しても会社では全く時期に関係する仕事には就いておりません。また、磁気関連の会社も減少しております。これから活躍する若手技術者はじめ、院生など新たな研究テーマが飛躍的に発掘、拡大でき、世界に情報発信できる学会になることを念じております。英文誌だけですと、海外論文誌に逃げてしまいます。院生などからの論文投稿数を増やすには、和文投稿も受け入れ、査読日数を短縮し、速報性と斬新な研究論文を特徴づけた論文誌にしてはいかがですか。

- ・ NdFeB 永久磁石，垂直記録，光磁気と世界的成果が生まれた時代には論文誌はどんな形態であれ心配はなかった。2000 年以降，これといった大発明，大発見がないのがすべての根源。MSJ に限らず，短期成果主義が招いた悪い結果。根気強く教育し，激励して次の天才を待つ。

- ・ 「ところが実施一年を経た現在，投稿論文数，特に学術講演会で発表された研究の投稿が従来半分にまで減少しています。」 磁性分野で新しい領域の広い発展性のあるテーマが出ていないことが，根因だと思います。研究者もテーマ探しに苦勞しているでしょう。学会誌以前の問題だと思います。日本だけでなく。学会誌としては，取り扱うテリトリーを少し広げることを考えられませんか。

- ・ インパクトファクターを重視するという方針ではJJAPやAPLなどと差別化できません。また、英文で書く手間を考えるとわざわざJMSJには投稿しないと思います。だいたい前のように論文特集号がメインで日本語で投稿できればよいと思います。以前の論文特集号は非常に利用価値がありました。

- ・ 日本磁気学会において学会発表における学生の割合は大きいと思う。英語での論文投稿に抵抗、負担を感じる日本の学生は多いと思う。さらに、どうせ英語で書くのなら、海外雑誌に投稿してみようと思う。ISI取得など国際的なインパクト、権威の強化よりも、国内学生の教育という側面を重視して、日本語論文を許容し、海外雑誌とのすみわけをした方がよいと私は考える。

- ・ 特集号でなくても印刷された冊子は不要です。電子ファイルで十分です。新しい号が出たときはその号へのリンクがついた電子メールをくればそれで充分です。

- ・ 編集委員会のご努力には敬意を表します。しかし、JMSJのインパクトファクターを高め、ISIに登録するのは現状ではほとんど不可能だと私は思います。この努力はすでに10年も前から続けられてきたはずですが実現されておらず、状況はますます厳しくなっていると思います。現在、日本の大学や研究機関では予算獲得のための評価や競争が熾烈を極めています。そのような状況の中で多くの研究者は優れた研究成果をインパクトファクターが高く、したがって発信力も高いジャーナルへ発表しようとします。まだ、ISIにも登録されていないジャーナルに投稿して、そのジャーナルのインパクトファクターを高め、育てていこうなどという余裕は、残念ながら今の大学や研究機関にはありません。本来学会を愛し育てていくためには、そのようなことをしなければいけないのですが、今の大学や研究機関は生き残りに必死で教員や研究者は日々の業務に忙殺されとてもそのような余裕はないのです。それが現実です。それほど優れているとは言えない平均的か、あるいはそれ以下の論文を発表する場としてJMSJを考えることができるかもしれません。しかし、そのような場合でも、すでにISIに登録され、establishされたジャーナルが存在する中で、まだISIに登録されていないJMSJに論文を投稿させるということは会員に多大な負担を与えることとなります。(いうまでもありませんが、ISIに登録されていないジャーナルで発表された論文の価値は現在の評価基準ではほとんど0です) 会員にそれだけの負担をかける価値があるかどうか磁気学会にとってそれが本当にいいことなのかどうかよく考えてみるべきです。会員に過剰な負担をかければむしろ会員は磁気学会から逃げることになるでしょう。すでにスピントロニクス分野では多くの研究者が応用物理学会を主たる発表の場と考え、磁石の分野は金属学会が主たる発表の場となっています。それらの学会に加えて、わざわざ磁気学会に入っていないければならないモチベーション、あるいは磁気学会の魅力が失われつつあるのです。それだけの負担を会員に強いて何とかISIに登録できたとしてもインパクトファクターが1にも達しないような低い値であればまったく意味がありま

せん。インパクトファクターを 1 以上にあげよう、今よりも下がらないようにしようということが至上命題となり、結局会員に負担を課し続けることになります。一方で JMSJ に対する論文投稿数が激減したのは、学術講演会の論文特集号を廃止してからであると私は理解しています。ISI 登録とか、インパクトファクターとかそういったことを考えなくても、学術講演会の論文特集号は学会員の間の情報交換として十分価値がありました。また、初めて論文を書く若手、学生に日本語でもいいから論文というものの書き方をしっかりと教えるという教育的な意味もありました。このようなニーズは現在でもあると聞いています。今の時代は 2 重投稿や成果の使いまわしも研究不正行為として厳しく禁じられていますので、論文特集号を復活させてどれだけ論文が集まるかはわかりませんが、試行的に復活させ状況を見る価値は十分あると思います。ISI 登録とかインパクトファクターとかにとらわれず、学会の原点に戻り、何をすることが学会のためになるのかを考えることが磁気学会の会員減少を食い止める唯一の道であると思います。これまでの編集委員会のご努力には敬意を表しますが、その努力がとらわれなくなり、学会の継続、発展に資するものとするためにはいまここで JMSJ のありかたの全面的な見直しを図るべき時であると思います。ご検討のほど、よろしくお願いいたします。

・ これまで貴重な実績が世界的に注目されてきた学会の存続が懸念される現在、改革、まことにご苦労様です。私は電気学会に理事も務めました。電気学会は十年ほど前存続の危機に直面しました。電子情報通信学会や情報処理学会などの新しい学会が発足し、会員の多数が出て行ったため、会員は半減しました。半官半民の電力 9 社という盤石のスポンサーに安住し、電力研究重視主義に偏していたためです。1888 年文部省主導(初代会長は元文部大臣)で創設され、運営も官主導でいつの間にか硬直化し、新しい研究が出にくい状態になっていきました。そこで十年前に改革に取り組み、大いに会員の意見を募り、①学術振興の面では、電子、情報分野も取り入れた部門制の導入(現在 4 部門+1 部門(英文誌))②運営の面では、支部活動の振興(支部交付金増、支部連合大会、セミナー他)③学会論文誌の査読の意識改革(新規研究、新規性重視)と迅速化、英語による投稿、査読電子システムなどの学会近代化を全員で実施、現在会員数も大いに盛り返しています。

本学会とは電気学会基礎共通部門の磁気応用部門と強い連携があります。

日本磁気学会の現状の深刻な状況は、電気学会の状況とは構造的に異なっています。すなわち、十年前から本学会の主力分野である磁気記録研究の成果が、携帯電話、スマートフォンに採用されないことが決定的になったことが主因の一つになっていると思います。これは科学技術の発展過程の問題ですから、仕方がないことであり、これは直視し認識せざるを得ないので、これを事実として、これからの日本磁気学会の将来を考える必要があると思います。IEEE Magnetics society, Intermag も全く同じ状況です、IEEE Transactions on Magnetics の論文を概観しても歴然としています。まさに磁気研究の戦国時代に突入の感ありです。新たなすごい研究が生まれるかもしれず、その意味では苦しみの中の楽しみの

時代に入ったという見方もできると思います。(学会運営は我慢の時期ですが)磁気の本質と新たな応用を徹底的に追求できる状況にあるとの見方ができると思います。

さて、本アンケートの件です。

JMSJ の発刊(2001 年創刊)の事情を確認しておく必要があります。きっかけは野依ノーベル賞受賞です。当時は日本の磁気研究(磁性材料と応用研究)のレベルは世界一の状態にあり、日本応用磁気学会の論文誌、会誌ともに TIEEE(TranslationIEEE)としてすべて英語翻訳され、IEEE Magnetics society は日本応用磁気学会に年間 60 万ほど、著作権料を払っていました。(当時は岩崎俊一会長、毛利総務理事)

日本の磁気研究の独創性が高いため、英文論文投稿ではいろいろなトラブルが続出していました。IEEE Transactions などでは故意に査読を引き伸ばしその間にほぼ同じ研究がどこかの国際会議で発表されたなどという問題がいくつも起きました。そこで、野依教授の提言をもとに、文部省(現文部科学省)の学会管轄担当から各学会へ出版費用補助を含め「日本独自に各学会が英文論文誌を発刊運営し、日本の独創研究を独力で英文で発信すべし」との勧告がなされました。TJMJ はそのような背景で発刊されました。文部省からの発刊費用補助は最初の数年(3 年?)は来ていたようです。

英文誌 TJMSJ 創刊当時は、会長以下意気込みは高く、編集委員会の査読体制も「日本の独創的磁気研究重視」を標榜して投稿を呼びかけました。私も全くの独創研究を投稿し、査読者との楽しい議論の末、

(1) 創刊号 "Gradual decrease of electric resistivity in water triggered by milligauss pulsed magnetic field,"TJMSJ,Vol.1, No.1, pp22-26, 2001.

(2) "Milligauss pulsed magnetic field applied photosphate buffered solution elevates intracellular Ca²⁺ level and stimulate phagocytic activity in human neutrophils,"TJMSJ, Vol.2, No.2, pp.15-18, 2002.

が掲載されました。欧米の学会論文誌では掲載されなかったでしょう。

これらの論文は、2013 年になって、欧米の基礎生理学の分野で注目され、R.Davidson et al., (Review) Biological Water Dynamics and Entropy : A Biological Origin of Cancers and Other Diseases, Entropy 2013, Vol.15, pp.3822-3876.に論文内容が詳細に解説されています。

このように、創刊時の 2, 3 年は十分所期の目標は達成していたと思われます。その後、ノーベル賞が翌年も出、これを受けての当時の小泉首相の「日本も結構独自性があるじゃないか」の一言で独創性の話はぱったりやんでしまいました。このような経緯を見れば JMSJ の役割の一端は完了したので、廃刊してもだれも批判はしないでしょう。ちなみに、電気学会は 2014 年度で英文誌を廃刊にしました。JMSJ は 2005 年ごろ廃刊になるべきところ、現在までずると続いています。その一つの名分は「日本は高度成長を達成し、これからはアジア地域のリーダーの役割を負う。JMSJ はそのツールとして必要」という意見です。しかし、現実にはアジアの磁気研究者が JMSJ に進んで投稿することはなく表紙の厚さが論文の厚さをしのぐ状態が続いています。インパクトファクター(引用率)を上げ、ISI 取得で状

況は改善するかもしれませんが、ISI 取得には、戦略と戦術が必要で時間がかかり、また、インターネット学術論文出版がますます盛んになっている現在ほとんど期待できないでしょう。まず、多くの引用が期待できる招待論文をいくつか集中的に掲載する必要があります。

2004 年以來日本では国立大学が法人化(実質民営化)し、世界的傾向の流れに従って「大学の知識工業化」が進んでいます。すなわち、あるレベル以上の論文の量産時代です。独創性はどこかに飛んで行ったまま、「知の工場」としての大学および学会は、論文を商品として量産する機関に変化しています。そこでは研究者はますます JMSJ に投稿しなくなります。電気学会は、英文論文誌は ISI の認定を受けていますが、それでも英文誌の将来性が期待できないと判断し、廃刊を決定しました。

JMSJ は論文誌としての発行はやめるべきでしょう。

しかし、せつかくの英文誌は貴重な学会の国際的研究情報発信機能であり、これを生かす方策を検討する意味はあるでしょう。

その一案は、これから 3 年間ほど徹底して「招待レビュー論文誌」とすることです。幸い日本磁気学会は、世界に通用する磁気研究者を多数擁しています。MSJ の強みです。

フェライト、垂直磁気記録、NdFeB 鍛造、ボンド磁石、アモルファス合金、方向性ケイ素鋼板、光磁気記録、磁気刺激、磁気センサーなどの国際的に著名な研究成果が並んでおり、それぞれのテーマの単独または特集招待レビュー英文論文集を季刊程度発行して、アジア各国の大学や研究所に配布することで、アジアでの存在感は増すでしょう。また、これが引用文献になることで、ISI 認定の布石にもなります。

改革のご健闘を祈念します。

- ・ お手数をおかけしますがよろしく願いいたします。
- ・ このようなアンケートは web サイトでやっていただけると助かります。費用などの問題もあると思いますが、検討いただければ幸いです。
- ・ アンケートはメールでいい

参考： 集計データ

論文の質	1 高い	2 やや高い	3 平均的	4 やや低い	5 低い	計
	5	34	46	11	7	103
速報性	1 満足	2 ほぼ満足	3 平均的	4 やや不満	5 不満	
	3	18	51	19	12	103
発信力	1 強い	2 やや強い	3 平均的	4 やや弱い	5 弱い	
	1	8	40	28	26	103
査読のハードル	1 高い	2 やや高い	3 平均的	4 やや低い	5 低い	

	4	25	54	16	2	101
興味深い論文	1 多い	2 やや多い	3 平均的	4 やや少ない	5 少ない	
	3	27	34	16	22	102